
「学園」 —Magic and Ability—

笹倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「学園」―M a g i c a n d A b i l i t y―

【Nコード】

N7796Y

【作者名】

笹倉

【あらすじ】

「嘘の新年」に行われた入学式。リンゴががしやがしやと音を立てて答辞を述べた。「学園」は弱肉強食――。入学初日から不名誉な異名、「子作り」（ラヴメーカー）をつけられた七臣蔵人。《無能力者》花村夏木。その他諸々の登場人物が学園を東へ西へ駆け巡る中学二年生が考えたような物語。

四月一日／「嘘の新年」

四月一日／「嘘の新年」／入学式

モニターに学園長（？）が映し出されている。場内で新入生たちがざわついた。司会役の教頭がそれを鎮める。「嘘の新年」、入学式の毎年の恒例行事である。「学園長からの有り難いお言葉」と教頭に紹介され、モニターに映し出された学園長。その容姿は、林檎であった。正確に言えば、林檎がベースであった。林檎の中心に大きな目が一つ、ついている（まるでギリシャ神話のキュープロクスのような目だ）。それから、林檎の下の方に設置されているのは？埋め込まれているのは？表現の仕方は分からないが、とにかく何かがついている。機械だ。長方形の銀色の機械がついている。その長方形から右、左にそれぞれ四本。計八本の細い針金のようなものがついている。「足」だ。それがかしゃかしゃと音を立てて、モニターに映っている。その大きな目がまばたきをする。シャッター音のような音。

「四月馬鹿ども」
エイプリルフール

合成音声で、嘘に騙された人——新入生——に林檎が語りかける。
エイプリルフール

「入学おめでとう。諸君らは学園に入学を許可された。これから君たちには数千、数万もの魔法公式、魔方陣を覚えて貰うことになる。君たちの頭は埋め尽くされるだろう。脳メモリーの容量は空けてきたか？能力者諸君はまだしも、無能力者の諸君は大変な努力が必要になるだろう。もう死にたい！　だとか、殺してくれ！　だとか。そういう時には学園の優秀な教師陣に言うように。あらゆる手段、あらゆる能力、あらゆる魔法、あらゆる体術で、君たちを絞めて殴って切って煮て焼いて捻り切り磨り潰し——殺してくれるだろう。よく聞け、義務教育は終わった。君たちは魔力を持っているから此処に来た。もう遊びの時間は終わったんだよ。終わったんだ」

林檎中央の目が三日月状に歪む。笑っているのだ。

「以上をもって、異常を持って！　学園長からの有り難いお言葉とする。諸君、」

映像が消える。モニターは黒一色。

「今日はエイプリルフールだよ。全て、嘘という事にすればいいさ！」

合成音声だけ。

四月一日／＼1－A

七臣は溜息をついた。入学式が終了し、そのまま能力査定が行われ、クラスが割り振られて（能力の有無、性質などを考えて割り振られるらしい）、教室に入れたのが入学式から六時間後。既に時刻は三時頃だ。一時頃には帰れると思ってた、ともう一度溜息。それから、何故このA組だけ教室が五階の離れの離れなのか、とも溜息。他の一年生は四階、僕たちは五階じゃあ差別じゃないか、と七臣は考える。それから、七臣は周りを見る。十八人――七臣はカウントする。自分合わせて十九人。自分の後ろの席が一つ空いているだけだから、クラスの人数は二十人。みな大人しく椅子に座っている。入学一日目だから、こんなものか、と考える。

がらり、と教室の戸が開く。みながそちらに目を向ける。戸を開けた主――長身の女――は、「ひ！」と小さな悲鳴を上げた。みな注目を浴びて吃驚したのだろう、と七臣は推測する。長身の女は腰を曲げて、頭をぺこぺここと下げながら移動し、七臣の後ろの席へ座った。ショートボブの髪が少し揺れる。色白で、鼻筋が通っている。目は大きく、まつげは長い。唇は薄いピンク。

――さて、突然であるがここで七臣について説明しよう。

シチオミクロウド

七臣蔵人。十五歳。能力持ち。水系、氷系、縛系魔法が苦手（魔法はあまり得意ではない）。体術は得意。黒髪。髪型ツীবロック。眉にかかる程度の前髪。色は日本人の平均程度。右耳にピアス三個。

舌にも一つ。左胸、右肩甲骨にタトゥーあり。あまり素行のいいようには見られないが、性格は世間一般の不良のイメージのように、見栄っ張りだとか、派手好きだとか、そういったことはない。能力については今は記述しないが、生まれたときから能力を発現していた、^{ネガティブ}先天性。その他特筆すべき点はない。ないが、強いて言うなら――

――彼は超肉食系男子だった。

七臣は立ち上がる。椅子ががたりを音を立て、周りの注目が七臣に向く。後ろの長身の女生徒の机にだん、と手をつける。また、ひと小さな悲鳴をあげる女生徒。

「お名前は!？」

七臣は大きな声を出す。周りの生徒達が怪訝な顔をする。え、と長身の女生徒は聞き返す。お名前は!？ とまた同じ質問をする。女生徒はしどろもどろになりながら、答える。

「は、花村……夏木です」

「ナツキ!」

「は、はい!」

ナツキは思わず背を伸ばす。七臣はぐい、とナツキに顔を近付ける。鼻と鼻が触れ合う位の距離だ。

「僕とセックスをしよう！」

七臣蔵人の不名誉な異名の理由は、ここから来ている。
ラヴメーカー

「子作り」――入学初日に決まった、彼の異名の一つだ。

／「1－A」

四月一日／「1－A」

七臣が過激なセックス発言を行った直後に、前のドアが開いた。黒いファイルを持った男。身長は百七十前半と言ったところで、細い縁の眼鏡をかけている。スーツは安物であろう、とすぐに考えられるほど薄汚れた感じがする。年は四十代前半と言ったところか。非常に細く、針金のような手足をしている。頭はきっちり七三に分けている。教壇へ上がると、教室全体を見回し、七臣に「はい、ちょっと座ってね」と声をかけた。七臣はぱくぱくと口を動かしたが、そのまま何も言わず座った。喧騒は止まない。当たり前だ、入学して六時間後、初めて顔を合わせたクラス、誰かに話しかけようか、そう緊張している最中、突然セックスしてくれと叫ぶ男子生徒。辺りがざわつかない筈がない。ナツキはと言えば、顔を真っ赤にし、頭からぷすぷすと煙を出し、あわあわとしている。七三の男は「どうしたの？　なんかあった？」と教壇から近い生徒に声をかけた。それから、「ちょっとお話することがあるから、静かにねー」と教室全体に言う。三十秒ほどで静かになった。

「初めまして。学園に入学おめでとう。私は1－Aの担任をするこ
とになった、山本博（ヤマモト／ヒロシ）です。担当学科は魔法全

てと魔方陣。皆さん、よろしく」

山本が教壇の上で礼をする。何人かは釣られて礼をした。礼をした後、「あ、博の字は博士のはか、の部分です」と付け足した。

「これからいくつか事務連絡をするんだけど、それ程多くないし、折角なのでもう少し私の事を詳しく知ってもらいたいなあ、って事で、まだ自己紹介をしようかなあ、と」

黒いファイルを机の上に置いて、チョークを持ち、黒板に円を書く。中に下向きの正三角形を一つ書いて、チョークを置く。

「さて、この陣が何の魔方陣か分かる人は居るかな？」

教室を見回すも、誰も答えるものは居ない。最初だから、手を挙げるのは恥ずかしいよねえ、と山本は笑い、それじゃあ当てちゃおうかな、とも言った。それじゃあ、と黒いファイルを開いて、中に挟んでいる名簿から目に付いた名前を口に出す。「陣織さん」

はい、と声がした。七臣の斜め右前の女。金色の髪が肩までかかっている。七臣の方からでは後姿しか分からない。と、言うより先ほども七臣は後ろしか見ていない。夏木の方だ。「メルアド教えてよ」「どこに住んでるの?」「好きな食べ物?」「兄弟とかっ

て居るの？」と小さな声で質問攻めをしている。ナツキは何も答えられず、先ほどこら顔を真っ赤にしているだけ。クラス全体は気付いているが、山本はそれに気付かず、陣織さん、この魔方陣は？と質問した。

「^{ファイア}炎です」

陣織、と呼ばれた女生徒は答えた。

「^{ファイア}その通り。炎。^{ウォーター}一番基本的な魔法だね。この三角形を上向きにすれば水だ。これ位の事は、魔力を持っていたら分かるね。遺伝子に情報が組み込まれているんだよ。生まれたときから知ってる。これは、^{ファイア}炎だ。陣織さん、もう一つ質問するね」

山本はまた黒板に円を書く。それから、中に正六角形を書く。それから、一呼吸を置いて。ふっ、と山本が息を吐く。陣織はその息を音を聞いた。かっかつとチョークと黒板が触れる音がした。陣織は目を見開く。他の生徒も目を見開いた。え、と驚きの声を出す者も居た。この教室内で驚いていないのは山本本人と話を聞いていない七臣と夏木の二人だけであった。

「それじゃあ陣織さん、この魔方陣は分かるかな？」

先ほどまで円と正六角形しか書かれていない魔方陣が、変貌している。円の周りに読めない文字がずら、と並び円の内部には龍の紋章、読めない文字、その他諸々が書き込まれている。山本が一瞬で書き込んだのだ。山本はその細い目を少し歪ませながら、「今、少

し意地悪をしています」と微笑んだ。陣織は、分かりませんと答えた。

「うん、当たり前だよ。これは上級魔方陣だから、君たちの遺伝子情報に組み込まれていないから。でもこれ位の魔方陣なら、勉強すればすぐ分かるようになるよ。魔法学や魔方陣学は奥が深いけど、理解すれば簡単なんだ。奥へ奥へ行くなら、やっぱり難しいけどね」

黒いファイルを閉じて、チョークで書いた魔方陣を消す。それから前を向いて。

「君たちは魔力を持っている。能力を持っている人も居る。――あ、魔力と能力の違いを分からない人も居るかな？ それじゃあ説明しようか。時間もあるしね」

山本は魔法、能力と文字を書いて、その二つの間に縦線を一本書いた。

「魔力、と言うのは魔法を扱う力だ。魔法、と言うのは、魔力を持つている人間全てが使える。勿論魔力量や適正などの関係で使えない魔法もあるけど、理論上は、魔力を持っていれば全ての魔法が使えるんだ。能力は違う。能力、というのは個人個人によって違うんだ。持っていない人間も居る。だけど、魔力を持っていて能力も持っている人間は居るけど、能力を持っていて魔力を持っていない人間は居ない。魔力は能力ありきなんだ。この学園では、そうだなあ、能力者の方が少し多い。一概に言えないけど、能力は魔力より強い。

殆どだ。例えばさっきの炎。^{ファイア}魔力を炎に変換する術だね。もし炎を発現させて操る能力者が居るとする。そうすると、同じエネルギー量で魔力で出した炎と能力で操られる炎。必ず魔力で出した炎が負ける」

山本は黒板に「魔法<能力」と書く。

「同じ炎の性質を持つ術で同じエネルギー量の魔法と能力がぶつかれば、間違いなく能力が勝つんだよ。魔法が能力に勝つにはどうすればいいか？ 一つは魔力量を多くすることだね。そうだなあ、魔力と能力のエネルギーをリングとする」

学園長のことだね、と微笑みながら、魔法と書かれたところにリングを一つ、能力と書かれたところにリングを一つ描いた。

「先ほど言ったとおり、これだと同じエネルギー量だ。能力は魔法に勝ち、魔法は能力に負ける。でも、」

山本は魔法の方にリングを四つ書き足す。魔法エネルギーのリングが五つ、能力エネルギーのリングが一つ、と山本が言った。

「これだと、魔力が勝つ。エネルギーの量が違うからね。でも、これは全く非効率的だ。すぐに魔力切れを起こしてしまう。効率のいい方法は、相性のいい魔法を使う事。ジャンケンみたいなものだね。炎に弱いのは？ 水だ。^{ウォーター}水の魔法を使えば、注ぎ込む魔力はリング

二つ分で済む。これで、魔法は能力に勝てる。まあでも、それでも圧倒的に無能力者が不利、ということは変わらないね」

文字やリングを全て消して、両手をぱんぱんと叩いてチョコクの粉を落とす。

「このクラスにも魔力しか持たない、能力を持たない、無能力者の人が居るね。正直に言うけれど、この学園で無能力者に対する風当たりは強い。無能力者差別みたいなものだよ。でも大丈夫だ」

実はね、と山本は微笑む。

「私はこの学園の教師陣で唯一の無能力者なんだ。だからこのクラス内で無能力者差別は許さないし、この学園内でも許さない。もしそういう事があれば、私の所へ来てください。学園長が言っていたでしょう——私が、殺しますよ」

二十秒ほど沈黙が続いて、冗談です、と微笑む。山本スマイルだと陣織は思った。

「さて、それじゃあ自己紹介とかは終わり。事務連絡に入ります」

ファイルに挟まっていたプリント類を机でとんとん、と整えて、それぞれの机の列の一番前の生徒に配っていく。山本は配っていく途中に、後ろを向いている生徒を発見する。——七臣だ。名簿で名

前を確認して、「七臣くん、前を向いてね」と注意する。

七臣は前を向かない。「七臣くん？」と山本は問いかける。名前の読みが間違っているのかな、ともう一度名簿を確認する。名前の読みが合っている事を確認して、もう一度問いかける。

「七臣くん」

七臣はがたん、と机を鳴らして前を向いて。ピアスが揺れる。しまった、という顔をして。

「あ、はい。すみません。えーと……キャ、キャサリン先生？」

「山本です」

「すみませんキャサリン先生」

「私は山本です。事務連絡をするので配られたプリントを後ろに回して、プリントに目を通してください」

「分かりましたキャサリ「山本です」」

／「帰宅間際」

事務連絡が終了し、山本がプリントをまとめた。

「今日はお疲れ様。明日から授業を始めるから、しっかり教科書を持ってきて下さい。頑張ろう。私も頑張ります。それじゃあ、帰宅してください。気をつけてね。寮の場所は分かるね？ 分からない人は同じ寮の人を見つけて帰ってください」

また明日、と言って山本は外へ出て行った。ふう、と教室中から息をつく音が聞こえた。七臣はすぐ後ろを向く。

「どこの寮に住んでるの？ 何号室？ 今度遊びに行っていない？」

「ええと、あの、ええと」

「ていうか今から暇？ もう四時だし、いい時間じゃない？ カラオケとか、どう？」

「その、ええと、あの、あ」

ナツキは気付く。七臣の後ろに立つ女と男。一人は陣織——もう

一人は赤髪の男。「カラオケとか行った事ない系の子？ そしたら僕んち来る？」と畳み掛ける七臣に踵落としを喰らわせたのは、陣織だった。え？ え？ とうろたえるナツキを尻目に、陣織は倒れた七臣のわき腹を革靴で思いつき蹴った。それから、ナツキを見て、初めまして、と微笑む。赤髪の男はといえば、倒れた七臣の頬をぺしぺしと叩いた。

「あたし、陣織。陣織少女」
ジンオリシヨウジヨ

「あ、え、あ、花村、花村夏木です」

「ナツキ、でいい？」

「あ、ええと、その、だ、大丈夫です」

「ナツキ、このエロ男と知り合いなの？ 急に立ち上がってあんなこと言うだなんて」

あたし、下ネタ、大嫌いなよね、とその金髪を指でまとめて、離れた。目、青い、とナツキは思う。

「ええと、知り合いじゃ、ないです」

「急に？」

「急に、です」

「変態じゃない、コイツ」

もう一度、げし、とわき腹を蹴る。うえ、と七臣が声を上げた。脳天を押さえて、七臣が立ち上がろうとする。赤髪の男が、無理すんなって、と止める。

「少女ちゃん、やりすぎちゃうのん？」
「いいのよ」

「いきなり踵落としするて、どうなん？」

「いいのよ、ていうか、貴方、名前は？」

「さっき言ってたやん、俺。入学式ん時に、少女ちゃんに声かけて」

「あたし利益のない事覚えらんないの」

「ひどいこと言うわあ」

「名前を言いなさいよ」

赤髪の男が手厳しいわあ、と笑う。

「筒木つづきや」

「下の名前も言いなさいよ」

赤髪の男の顔が曇る。

「……俺、下の名前コンプレックスやねん」

「いいから言いなさいよ」

「いや、コンプレックスなんやて」

「だから？」

「コンプレックス」

「え？」

「……啄木つづき鳥」

「え？」

「啄木つづき鳥！ 筒木啄木つづき鳥！」

別に面白くないじゃない、と陣織が言う。別に面白いなんか言うてへんけどね、と啄木鳥が口を尖らせる。ナツキは二人のやり取りを見て、何も言えない。七臣はようやく立ち上がる。それから、陣織に「君は誰だ」と問う。陣織は名前を答える。

「なんで僕に踵落としたんだよ」

「あたし下ネタ嫌いなもの」

「下ネタなんて言ってるやない。告白だ」

「うるさいわね」

「君はタイプじゃない。僕は黒髪の子が好きだ」

「うるさいわねコイツ」

「あ、俺もそれ思うたわ。黒髪の子、ええよね」

「コイツもうるさいわね」

「君、名前は？」

「俺は筒木」

「下の名前も教えてくれ」

「下の名前、コンプレックスやねん」

「教えてくれ」

「コンプレックスやねん」

「教えてくれ」

「コンプレックスやて」

「教えてくれ」

「コンプ「教えてくれ」」

「……啄木鳥」

「筒木啄木鳥。別に面白くない」

「あたしも思った」

「別に面白いなんか言うてへんっちゅうねん」

「そうだ、ナツキちゃん、カラオケとか」

「え、あ、ええと」

「ナツキ、寮はどこ？ 東西南北、どこの寮？」

「あ、え、ええと、西寮です」

「あたしもよ。なら一緒に帰りましょ」

「ちよお、俺も西寮やから、一緒に帰ろうや」

「キツツキは黙ってて」

「ナツキ、カラオケ」

「変態は黙ってて」

「七臣はどこの寮なん？」

「蔵人でいいよ。ナツキ、帰ろう」

「蔵人はどこの寮なん？」

「僕も西だ」

「ほんなら一緒に帰らへん？」

「僕はナツキと帰る」

「ナツキはあたしと帰るから。変態とキツツキで帰りなさいよ」

「ええやん、同じ西寮やろ」

「駄目。駄目よ」

「ナツキ、僕と」

わあわあと言いつき合いになる三人。ナツキはおろおろと目を瞬かせながら、「い、一緒に帰りましょう！」と提案していた。

四月二日／「授業間際」

／四月二日／夜明けの部屋

暗い部屋。床がぎりぎり音を立てている。片手逆立ちで腕立てをしている、人影。左手の血管が浮き出ている。

「百二十一……百二十二……！」

後三十八回、とその人影は思う。床が軋む音。百二十三回目。

／四月二日／1－A

陣織が真っ青な顔でナツキと共に教室に入ってきたのを、啄木鳥は見た。七臣はナツキに「おはよう！」と声をかける。啄木鳥は、陣織に、「何か顔色悪いで」と話しかけた。

「キツツキ、あたしの部屋、霊が住んでるわ」

「はあ？」

「ラップ音がするの。ぎぎい、ぎぎいって！」

そうなん？ と啄木鳥は首を傾げた。ナツキに話しかけ続ける七臣を引き剥がして、ナツキちゃんの部屋からは聞こえへんのん？ と聞く。

「き、聞こえないの」

「ナツキちゃんの部屋、少女ちゃんの隣やんなあ？」

「そうなのよ！ なのにナツキの部屋からは聞こえないの」

ついでに言えば、啄木鳥の部屋と七臣の部屋も隣である。昨日一緒に帰宅して発覚したことだ。

「ほんなら、憑かれとるわ」

「やめてよ！ あたしお化けとか大嫌いなよ！」

「いやあ、憑かれとるやろ」

「で、でもわたしの部屋は大丈夫だよ」

「そういうのって、部屋に憑くからちゃう？」

「ちよっとキツツキ、やめてよ！」

陣織が、ばん、と啄木鳥の背中を叩く。

ここで七臣が口を開いた。

「陣織」

「なによヘンタイ」

「塩は試した？」

「塩？」

「ああ、盛り塩とか、言うもんなあ」

「僕は年に五十回以上金縛りにあうプロ金縛ラーだが」

「何よ金縛ラーって」

「盛り塩は、効くぞ」

「ホント！？」

「へえ、そうなんやあ」

ナツキ、今日の帰りに塩を買いに行きましょ！ と大きな声で言う。回りのクラスメイト達は何の話だ、と笑う。クラスは既にいくつかのグループに別れていた。七臣、啄木鳥、ナツキ、陣織のグループはクラスの中でもやかましいグループだ。啄木鳥が周りのクラスメイトに、ごめん、なんでもないから、と笑いながら言った所で、始業のチャイムが鳴った。朝のショート・ホーム・ルームだ。山本ががり、と戸を開けて現れた。服装が昨日と全く変わっていない。

「おはようございます。椅子に座って下さい。——うん、全員出席だね。それじゃあ、連絡。今日、一時間目から、いきなりだけど、教育実習生の子が授業するから。魔法学。教科書、持ってきてますよね？ 教育実習生の子が授業してる間、私は後ろで見えますから。しっかり授業を受けるように。寝てたら起こしますから。んー、後は特にないかな。あ、二時間目からはクラスタイムだ。それくらいかな。以上！」

それじゃあ後でねー、と山本スマイルを残してから、教室から出て行く。

ナツキが、クラスタイムって、何かな？ と口に出した。七臣が、分からないなあ、と言って、右斜め前の陣織に聞く。

「クラスでの戦闘演習よ」

「戦闘演習？」

「皆の魔法とか能力とか、見せ合うんじゃないかしら」

それからうだうだとその三人で喋る。七臣は啄木鳥を見る。啄木鳥は啄木鳥の席の周りの人間と談笑していた。

チャームが鳴る。クラスの人々は魔法学の教科書を机から出した。ナツキが、あ、と声を漏らす。

七臣が後ろを向く。

「どうしたの？」

「――きよ、教科書、忘れちゃった」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7796y/>

「学園」—Magic and Ability—

2011年11月23日16時47分発行